



コーパス調査に基づく現代日本語におけるスタンス 表出システムの解明と日本語教育への応用：一人称 代名詞・文末詞・陳述スタイル・ヘッジの分析

肖，錦蓮

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2023-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8236号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008236>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文要旨

氏 名 肖 錦蓮

専 攻 グローバル文化

指導教員氏名 石川 慎一郎

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

コーパス調査に基づく現代日本語におけるスタンス表出システムの解明と日本語教育への応用：一人称代名詞・文末詞・陳述スタイル・ヘッジの分析

論文要旨

一般に、言語は意味内容を伝達する媒体であるとされるが、実際のコミュニケーションにおいて、書き手や話し手は、同時に、自身の立場・判断・意見・感情といった主観的態度も表出する。こうしたスタンスの表出は、様々なスタンスマーカによってなされる。本研究では、一人称代名詞・文末詞・陳述スタイル・ヘッジという4種類のスタンスマーカを取り上げ、日本語母語話者コーパスおよび日本語学習者コーパスの解析によって、現代日本語におけるスタンスマーカの使用実態と用法特性、さらに、中国人日本語学習者による使用状況と習得上の課題の解明を目指す。

本研究は、全4部、13章から構成されている。第Ⅰ部「研究の枠組み」は4つの章からなる。まず、第1章「問題提起」では、日本語母語話者および学習者のスタンス表出の事例を示し、スタンスマーカの研究の必要性和本研究の意義について述べる。

第2章「スタンス研究の前提」では、スタンスおよび関連概念の定義、各種のスタンス表現形式を整理したあと、本研究におけるスタンスの定義を行い、調査対象とするスタンスマーカを示す。

第3章「先行研究」では、代表的な日本語コーパスを概観したあと、4種のスタンスマーカごとに、主要な先行研究を概観する。

第4章「リサーチデザイン」では、本研究の目的、使用するコーパス、統計手法などについて概説を行う。

第Ⅱ部「現代日本語におけるスタンス表出」は、4つの章から構成される。まず、第5章「現代日本語における一人称代名詞使用」では、一人称代名詞(単数形・複数形)を対象として、表現形のバリエーション、フォーマル度、共起語などを調査する。その結果、単数形と複数形にはともに60種を超える表現形が存在すること、単数形のフォーマル度は《ワタシ・ワタクシ》>《ボク》>《オレ》>《アタシ》となること、複数形は《ワレワレ》>《ワタシタチ・ワタクシタチ》>《ボクタチ》となること、語・異形・文字種が異なれば代名詞が表出するスタンスが大きく変わることが確認された。

第6章「現代日本語における文末詞使用」では、7種の文末詞(「かしら」「わ」「わね」「わよ」「のよ」「Nね」「Nよ」)を対象として、経年変化、典型性、使用場面の3つの観点から調査を行う。その結果、小説では1970年代から2000年代にかけて文末詞の使用数が増えること、使用者は女性に限らなくなっていること、「わ系」が最も多用されること、文末詞は話者の性別が女性であることを示すための場面で使用されやすいが明らかになった。

第7章「現代日本語における陳述スタイル選択」では、ジャンル差と年代差という2

つの観点から調査を行う。その結果、常体率はジャンルによって100%から5%まで大きく変化すること、経年的に常体率が低下していること、読者に敬意を払う必然性と陳述する内容の性質によって常体と敬体のバランスが決定されていることが確認された。

第8章「現代日本語におけるヘッジ使用」では、83種のヘッジを対象として、言語環境ごとの使用実態、典型的語義、意味緩和機能に対する母語話者の意識などを調査する。その結果、10ジャンルで汎用的かつ高頻度に使用されるヘッジは30種に絞られること、とくに重要な9種のヘッジが有する45の語義のうち、一定の割合で使用されるものは19語義に絞られること、「頃」「感じ」「ほう」はとくに強い意味緩和機能を有することが確認された。

以上の母語話者コーパス調査の結果をふまえ、第Ⅲ部「中国人日本語学習者のスタンス表出」では、学習者コーパスを用いた分析を行う。第Ⅲ部は4つの章から構成される。まず、第9章「中国人日本語学習者の一人称代名詞使用」では、使用量、習熟度の影響、共起パターンの3つの観点から調査を行う。その結果、男女問わず学習者は母語話者よりも一人称代名詞を過剰使用すること、過剰使用は習熟度の上昇によってある程度改善するものの、上級者であっても過剰使用傾向が残ること、学習者・母語話者間で一人称代名詞の共起パターンが異なることが明らかになった。

第10章「中国人日本語学習者の文末詞使用」では、使用量、使用状況、習熟度の影響の3観点から調査を行う。その結果、女性学習者が使用する文末詞のトークン数は母語話者の1/5以下でタイプ数も少ないこと、習熟度が上昇しても使用量はほとんど減らず、習熟度による変化が見られないことが確認された。

第11章「中国人日本語学習者の陳述スタイル」では、縦断型作文コーパスを用い、敬体から常体に切り替わる「常体シフト」に関して、その発生時期、発生パターン、関連要因の3観点を調査する。その結果、常体シフトは学習開始後29ヶ月後頃に起こること、常体シフトの発生時期には3つのパターンが存在すること、作文テーマの公的性・距離性が高くなると常体率が上がり、授業外での発話機会が増えると常体率が下がることなどが明らかになった。

第12章「中国人日本語学習者のヘッジ使用」では、使用量、学習段階別マーカ、習得段階という3観点から調査を行う。その結果、ヘッジのトークン数は線形的に増加するがタイプは一度増えて減少に転じること、「恐らく」や「～げ(気)」は母語話者のみが使用し、「少々」や「必ずしも」は学習者のみが使用すること、学習者のヘッジ習得は中級後半と上級前半を節目として質的に大きく変化することが確認された。

第Ⅳ部「まとめ」として、第13章「本研究で得られた知見および制約と課題」では、各章で得られた知見をまとめ、制約と課題について触れる。また、既存の教科書を利用しつつ、授業の中で追加的に利用できるタスクシートの在り方について検討した。

研究者の主観や内省に頼ったスタンス研究が多い中で、本研究はコーパス言語学の枠組みに基づき、大規模な言語データベースを計量的に分析することで、母語話者および中国人日本語学習者によるスタンスマーカの使用実態を詳細に観察した。本研究で得られた知見は、日本語学のみならず、日本語教育の改善にとって有用な資料となりうるであろう。

論文審査の結果の要旨

氏 名	肖 錦蓮			
論文題目	コーパス調査に基づく現代日本語におけるスタンス表出システムの解明と日本語教育への応用：一人称代名詞・文末詞・陳述スタイル・ヘッジの分析			
判 定	合 格 ・ 不 合 格			
論文チェックソフトによる確認	☒ 確認 (2022/2/4 に確認実施。審査委員に結果報告済み) ☐ 未確認 理由：			
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名	論文審査結果について
	委員長	教授	柏木 治美	☒ 確認
	委 員	教授	石川 慎一郎	☒ 確認
	委 員	早稲田大学・教授	李 在鎬	☒ 確認
	委 員			☐ 確認
	委 員			☐ 確認
要 旨				
(概略) 学位申請者肖錦蓮氏の論文「コーパス調査に基づく現代日本語におけるスタンス表出システムの解明と日本語教育への応用：一人称代名詞・文末詞・陳述スタイル・ヘッジの分析」(全 313 ページ) は、日本語学習者にとって習得が困難であるとされる日本語のスタンス表現を対象として、コーパス言語学の分析手法に基づく分析を行い、その用法を解明し、日本語教育への応用の可能性を論じたものである。 (論文の概要) 本論文は、全 4 部、13 章から構成されている。第 1 部「研究の枠組み」は 4 つの章からなる。まず、第 1 章「問題提起」では、日本語母語話者および学習者のスタンス表出の事例を示し、スタンスマーカーの研究の必要性和本論文の意義が述べられる。第 2 章「スタンス研究の前提」では、スタンスおよび関連概念の定義、各種のスタンス表現形式を整理したあと、本論文におけるスタンスの定義を行い、調査対象とするスタンスマーカーが示される。第 3 章「先行研究」では、代表的な日本語コーパスを概観したあと、4 種のスタンスマーカーごとに、主要な先行研究が概観される。第 4 章「リサーチデザイン」では、本論文の目的、使用するコーパス、統計手法などについて概説が行われる。				

第Ⅱ部「現代日本語におけるスタンス表出」は、4 つの章から構成される。まず、第 5 章「現代日本語における一人称代名詞使用」では、一人称代名詞（単数形・複数形）を対象として、表現形のバリエーション、フォーマル度、共起語などが調査される。その結果、単数形と複数形にはともに 60 種を超える表現形が存在すること、単数形のフォーマル度は《ワタシ・ワタクシ》> 《ボク》> 《オレ》> 《アタシ》となること、複数形は《ワレワレ》> 《ワタシタチ・ワタクシタチ》> 《ボクタチ》となること、語・異形・文字種が異なれば代名詞が表出するスタンスが大きく変わることなどが報告される。 第 6 章「現代日本語における文末詞使用」では、7 種の文末詞（「かしら」「わ」「わね」「わよ」「のよ」「N ね」「N よ」）を対象として、経年変化、典型性、使用場面の 3 観点から調査がなされる。その結果、小説では 1970 年代から 2000 年代にかけて文末詞の使用数が増えること、使用者は女性に限らなくなっていること、「わ系」が最も多用されること、文末詞は話者が女性であることを示すための場面で使用されやすいことなどが報告される。 第 7 章「現代日本語における陳述スタイル選択」では、ジャンル差と年代差という 2 つの観点から調査がなされ、常体率はジャンルによって 100%から 5%まで大きく変化すること、経年的に常体率が低下していること、読者に敬意を払う必然性と陳述する内容の性質によって常体と敬体のバランスが決定されていることが報告される。 第 8 章「現代日本語におけるヘッジ使用」では、83 種のヘッジを対象として、言語環境ごとの使用実態、典型的語義、意味緩和機能に対する母語話者の意識などが調査される。その結果、10 ジャンルで汎用的かつ高頻度に使用されるヘッジは 30 種に絞られること、重要な 9 種のヘッジが有する 45 の語義のうち、一定の割合で使用されるものは 19 語義に絞られること、「頃」「感じ」「ほう」が強い意味緩和機能を有することが報告される。 第Ⅲ部「中国人日本語学習者のスタンス表出」では、学習者コーパスを用いた分析がなされる。第Ⅲ部は 4 つの章から構成される。まず、第 9 章「中国人日本語学習者の一人称代名詞使用」では、使用量、習熟度の影響、共起パターンの 3 つの観点から調査がなされ、男女問わず学習者は母語話者よりも一人称代名詞を過剰使用すること、過剰使用は習熟度の上昇によってある程度改善するものの、上級者であっても過剰使用傾向が残ること、学習者・母語話者間で一人称代名詞の共起パターンが異なることが示される。 第 10 章「中国人日本語学習者の文末詞使用」では、使用量、使用状況、習熟度の影響の 3 観点から調査がなされ、女性学習者が使用する文末詞のトークン数は母語話者の 1/5 以下でタイプ数も少ないこと、習熟度が上昇しても使用量はほとんど減らず、習熟度による変化が見られないことが報告される。 第 11 章「中国人日本語学習者の陳述スタイル」では、縦断作文コーパスを用い、敬体から常体に切り替わる「常体シフト」に関して、その発生時期、発生パターン、関連要因の 3 観点が調査される。その結果、常体シフトは学習開始後 29 ヶ月後頃に起こること、常体シフトの発生時期には 3 つのパターンが存在すること、作文テーマの公的性・距離性が高くなると常体率が上がり、授業外での発話機会が増えると常体率が下がることなどが報告される。 第 12 章「中国人日本語学習者のヘッジ使用」では、使用量、学習段階別マーカー、習得段階という 3 観点から調査がなされる。その結果、ヘッジのトークン数は線形的に増加するがタイプは 1 度増えて減少に転じること、「恐らく」や「〜げ（気）」は母語話者のみが使用し、「少々」や「必ずしも」は学習者のみが使用すること、学習者のヘッジ習得は中級後半と上級前半を節目として質的に大きく変化することが報告される。 第Ⅳ部「まとめ」となる第 13 章「本研究で得られた知見および制約と課題」では、得られた知見をまとめ、制約と課題が述べられる。また、授業の中で追加的に利用できるタスクシートの在り方についての提案がなされる。 (総合評価) 本論文は、コーパス言語学の枠組みに基づき、大規模な言語データベースを計量的に分析することで、母語話者および中国人日本語学習者によるスタンスマーカーの使用実態を詳細に観察した点で独自性を有する。本論文は、従来の日本語学・日本語教育学において十分な光が当てられていなかったスタンス表現について、その言語的特性や学習者の習得実態を記述的に解明した労作であり、日本語学・日本語教育学的に価値ある業績と結論できる。学位申請者はこれまでに学会・研究会で 7 回の研究発表を行い、学術論文 6 編を発表しており、研究の基礎力にも不足はない。よって、本審査委員会は、全員一致で、学位申請者である肖錦蓮氏に、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。
--